

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第56回

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

厚見 王の歌

(巻第八 一四三五番歌)

蝦鳴く甘奈備川に影見えて
今か咲くらむ山吹の花

人は、新しいことに挑戦したくなるときがある。やってみようかなと心のどこかがうずうずする感じだ。しかし、道具を揃えるのには、勇気がいる。「どうせ、部屋のすみほこりをかぶって置いておくだけなんだから。」と家族の声がある。だからまだ言わない。三日坊主にしては、あまりにもつたいないのは自分でわかっている。どうする、どうしようと問いかけながら、結構わくわくしてくる。カタログを集めたり、専門店を探したり。店員さんに話しかけたら買ってしまうから、今日はこっそり「見てるだけ」にしよう。そうかと思うと、ずっと夢だった物を年を経てようやく手に入れることがある。今出合ったのはきつと縁なのだ。いよいよあなたの番です、どうぞとばかりに目の前にやってくる。昔からの、そう、「憧れ」のもの。それを手にした自分を思うとやはりわくわくする。そこでまた家族の声。「そんなものにお金を遣って・・・」秘密にしようか、相談するか。そうだ、頑張ってきた自分への褒美にしようなんて、思い切る理由をあれこれ考え出してみよう。そんな時間が楽しい。ただひたすら憧れるだけの子どもの頃には無かった感覚だ。

甘奈備(神名備)というのは、神座となる山や森をいう普通名詞でどこに



でもありうるが、ここは、故郷の飛鳥川かと思われる。蛙の鳴き声は、胸にさわさわとさざ波を立てる。昔を思ったり恋しい人をあんじたりする思いを呼び覚ます。川に写る影も、恋しい故郷の今を思わせる。鮮やかに咲き続ける山吹の黄色い花は、恋人の印象として詠まれる歌が多い。他には、命を復たさせる泉のある山に、山吹の花が美しく咲き飾られていると詠まれた歌もある。華やかでまばゆい美しさは、見る者の心を射止める。川に映れば、なおさら広がりを見せ、思いが深まる。「河鹿の鳴く甘奈備川に影を映して、今が盛りと咲いているだろうか、ふるさとの山吹の花は」

写真の碑は、愛知県春日井市のふれあい緑道の中にある。庄内川から歩けば、八キロ・二時間の健康コースだそう。公園を結ばば、四キロのコースで、緑あり、埴輪あり、万葉の碑があり。子どもの遊び場もあり、ベンチもありと、歩くだけで心の元気が湧いてくる。

あ、つい店員に話しかけてしまった。品揃えの良い店だった。親切な店員と、つい話し込んでしまった。格安の良い品も見つけた。もうやるしかない。新品の道具の入った袋を肩にかけ、希望に満ちて歩いた。本屋にも立ち寄ろう。娘も巻き込もう。そうして、人生を楽しもう。たとえ一年間、いや、三日間だけになっても・・・がんばるぞ。